

『アーディテヤヒリダヤム』からの抜粋
スーリヤ神への賛歌

『アーディテヤヒリダヤム』
第 21 節～第 24 節

第 21 節

तप्तचामीकराभाय वह्नये विश्वकर्मणे ।
नमस्तमोऽभिनिघ्नाय रुचये लोकसाक्षिणे ॥

*taptacāmīkarābhāya vahnaye viśvakarmaṇe /
namastamo 'bhinighnāya rucaye lokasākṣiṇe //*

天上の創造者であり、
溶融した黄金のように輝き、
空を横切り、
暗闇に打ち勝ち、
世界の目撃者である輝く存在に、敬意を表す。

第 22 節

नाशयत्येष वै भूतं तदेव सृजति प्रभुः ।
पायत्येष तपत्येष वर्षत्येष गभस्तिभिः ॥

*nāśayatyeṣa vai bhūtaṁ tadeva sṛjati prabhuḥ /
pāyatyeṣa tapatyēṣa varṣatyēṣa gabhastibhiḥ //*

実に、神はまさしくこの世界を破壊し、
それから世界を新たに創造する。
彼は自らの熱で焼き尽くし
そして雨を降り注ぐ。

第 23 節

एष सुप्तेषु जागर्ति भूतेषु परिनिष्ठितः।
एष एवाग्निहोत्रं च फलं चैवाग्निहोत्रिणाम्॥

*eṣa supteṣu jāgarti bhūteṣu pariniṣṭhitaḥ /
eṣa evāgnihotraṁ ca phalaṁ caivāgnihotriṇām ||*

眠っている者の中で、彼は目覚めている。

実在するあらゆるものの内側に、彼は存在している。

彼は火にささげられた供物であり、

それらの供物の成果である。

第 24 節

वेदाश्च क्रतवश्चैव क्रतूनां फलमेव च।
यानि कृत्यानि लोकेषु सर्व एष रविः प्रभुः॥

*vedāśca kratavaścaiva kratūnām phalameva ca /
yāni kṛtyāni lokeṣu sarva eṣa raviḥ prabhuḥ ||*

彼は数々のヴェーダであり、ささげ物であり、

ささげ物の成果であり、

行われるべきささげるという行為である。

この世界では、ラヴィ神はすべてである。

賢人ヴァールミーキがサンスクリット語で書いた古代の叙事詩、『ラーマーヤナ』からのこの抜粋では、太陽の神であるスーリヤ神——ラヴィまたはアーディテヤとしても知られている——を、創造の背後にある生命を与える力として褒めたたえています。

これらの詩節は叙事詩の第6巻「ユッダ・カーンダ(戦闘の巻)」のクライマックスの挿話の中に登場します。ダルマの体現であるラーマ神は、無知の象徴である魔王ラーヴァナとの戦いを始めようとしています。これを見ていた賢人アガスティヤは、『アーディティヤヒリダヤム』というスーリヤ神への祈りの形を取った励ましの言葉とともに、この英雄に近づきます。

ラーマ神が太陽の形を取った神、スーリヤ・デーヴァターを呼び起こすや否や、彼はラーヴァナを倒す強さと自信を、ついに自らの中に見いだします。ラーマ神の勝利は、無知に対して内なる知識が最終的な勝利を収めることを示しています。

『アーディティヤヒリダヤム』からのこれらの詩節は、新たな始まりはいつでもスーリヤ・デーヴァターをたたえるのに幸先の良い時であることを思い出させます。太陽は、大いなる意識の光の象徴です。それは尽きることのない育みの力を持ち、不変で常に新しい英知の源なのです。

